【80 分ワークショップ・①】

11. CPEA って何の略？地域をつくる湿地教育を考える
12. 森が薫る燻製づくり
13. 一流を学ぶ…第一印象と名刺交換
14. 「水の足跡」―スペース・ウォークを使って―
15. 環境・CSR 活動評価チェックリストを使ってみよう
16. 海の森からの贈り物～海藻おしば～
17. 告知・広報に活かす”伝わる”“伝える”文章講座
18. 環境教育と家族
19. アクティビティを再生する
20. 野外での事故に備えよう！「野外・災害救急法」の体験

【80 分ワークショップ・②】

21. いま「公害教育」を考える
22. 「いつもの暮らし」を環境教育プログラムに！
23. 「自然から学ぶ場と人の全国フォーラム」中間検討会
24. SDGs でつなげる地域と活動ワークショップ
25. 銀粘土で作る　リーフモチーフの純銀アクセサリー
26. 幻想は捨てよう！NPO と行政の溝を埋める 80 分
27. 火を囲み、みんなで作る「居場所」つくり
28. マジックで環境教育に活用する
29. 拡げよう！特定外来生物駆除活動の輪！
30. 持続可能な未来のための科学技術との付き合い方 2

WS11

CPEA って何の略？地域をつくる湿地教育を考える

実施者： 朝岡 幸彦（東京農工大学 教授）・田開 寛太郎（東京農工大学大学院）・
石山 雄貴（東京農工大学大学院）

【概要】

「湿地」「CEPA」「地域づくり」「大型鳥類」というキーワードに興味、関心がある人向けのワークショップ。はじめに「湿地」「CEPA」などのキーワードの説明を 10 分程行った。自己紹介と“湿地”に関する考えの共有をした後は、グループワークを通して「湿地」に関するイメージ、意見を参加者同士で話し合い、おわりに湿地と環境教育をつなげ、アイディアをまとめた。

【実施内容】

1）全体説明

はじめに実施者の湿地教育の研究に触れながら、今回のキーワード「湿地」「CEPA」「地域づくり」「大型鳥類」の説明や PowerPoint で研究の様子を写真で紹介した。

今回の WS の目的は以下 3 つ。①「わたし」と「湿地」の関係を振り返る、②湿地に関わる環境教育の情報共有、③地域づくりと結びつく「湿地教育」を考える。

2）自己紹介

A4 の紙を使い、3 つの面のコーンを作った。それぞれの面に“名前（ニックネーム）”“所属”“湿地のイメージ”を記入し、明るい雰囲気で自己紹介が行われた。“湿地のイメージ”の発表では「ドロドロしている」「いろいろの発見の宝庫」など湿地で見えるもの、湿地という名前から連想する感覚など、参加者ひとりひとり違うイメージが発表された。

3）グループワーク

①グループワーク

グループワークへ入る前に、1 人 1 人に自己紹介時に書いた”湿地のイメージ”を更に 1 分、深く考える時間が設けられた。その後、グループごとに湿地から連想されることを A４の紙に書きまとめた。各グループの A4 の紙には”湿地”のアイディアをマインドマップで書いたり、箇条書きで書いたりと様々なまとめ方がされていた。

また話し合いをしていく中で幼少期の体験、湿地で遊んだ思い出やそこに棲む生き物についてなどの、参加者同士の経験に引きつけながら話が進み、終始楽しい雰囲気でグループワークが進められた。

②グループの入れ替え

話し合いの中で意見が出された後、グループの入れ替えが行われた。各グループの中で誕生日が一番若い人がテーブルに残り、残りの参加者が他のグループに移動した。新たなグループで「湿地に関わる環境教育といえば」というお題をもとに、話し合いが行われた。

4）ブレーンストーミング

グループごとに、お題に対する答えが書かれたポストイットを 1 枚の模造紙に持ち寄り、まとめた。はじめに、参加者のアイディアを「湿地教育の目的」「湿地教育の内容」「湿地教育の対象」の 3 項目に振り分け、アイディアを整理した。参加者のアイディアは、最終的には上記の項目以外に「教育の場」「人材育成」「素材」などに分類された。参加者は積極的に意見を出し合われ、時間内に議論が収まらないほどの盛り上がりを見せた。

5）事例紹介

最後に実施者から、豊岡市の湿地保全を中心とする「地域づくりと大型鳥類コウノトリの野生復帰の取り組み」について紹介された。具体的には、豊岡市の学校教育現場における取り組み、学校外におけるコウノトリ KIDS クラブの取り組み、コウノトリ野生復帰事業の構造の試案について示された。

【まとめ】

このワークショップでは、はじめに参加者の「湿地」のイメージを共有した。参加者の中には、「湿地のイメージが広がった」「身近に湿地があるんだ」などの驚きや発見があった。そして、グループワークで話し合いが進むと、教育について話をしたり、遊びについて話をしたり、さらには参加者の思い出を共有したりと、様々な角度から議論が進み、意見も多様化していた。

【記録担当者】坂田　拓史

WS12

森が薫る燻製づくり

実施者： 加藤　春喜（特定非営利活動法人白川郷自然共生フォーラム）

【概要】

このワークショップでは、実施者が用意した8種類の燻材チップを使っての燻製作りと、“森”の木で燻材チップを自作する活動を参加者が実際に体験し、これらの活動をプログラム等の様々な場面で、どのように活用することができるのかについて、参加者間で議論した。

【実施内容】

1）お互いを知るための自己紹介、話題提供

参加者は円を描くように誕生日順に並んで座り、自分の名前とこのワークショップに期待していることを紙に書いて、順番に自己紹介を行った。「燻製を食べられそうだから」「自分で狩ったイノシシやシカを燻製にしてみたい」といった、お互いの参加動機が共有された。

参加者に続き、実施者が自己紹介を兼ねながら、改めてこの企画の意図を説明。環境教育プログラムのアイテムとして、自身が燻製に多くの可能性を感じていること、他方で、食中毒や火、刃物等、多くの危険もはらんでいることから、様々な経験を持つ参加者のみなさんの視点でリスクを洗い出したいと語った。その後、白川郷に古くから伝わる保存食の紹介とともに、燻煙には酸化防止の効果があることや、燻製には冷燻、温燻、熱燻の 3 種類があることなど、食品の保存技術の一つとして古くから利用されてきた燻製のあらましを解説。今回は短時間で誰もが手軽に楽しめる熱燻を実践した。

2）燻製、燻材作り

はじめに、熱燻の方法と燻材の作り方を説明。ブナ、ミズナラ、オニグルミ、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ウリハダカエデ、アズサ、リンゴの8種類の燻材の紹介や、殺菌効果が期待できない熱燻の食材には、チーズやソーセージ、木の実等、そのままでも食べられる物を使用する説明があった。

次に、参加者に3種類の木の実が入った袋を回し、同じ木の実を引いた人同士3グループに分かれて燻製作りを体験した。各グループはお好みで燻材を選択。①鍋底にアルミホイルを敷き、パラパラと燻材をまぶす。②金網を鍋底から浮くように載せる。③食材を金網に載せる。（食材の下にだけ、アルミホイルを千切って敷く。）④鍋に蓋をして熱する。5分ほどで、食材に色や香りがつき、それぞれで様々な樹木の燻製を味わった。

燻す間、燻材チップ作りを自由に行えるよう、6種類の木枝とナイフ、鉛筆削りなども用意された。鉛筆削りはチップが細かくなることから、大目に作る必要があることも併せて伝えられ、自作した燻材チップは、ティーパックに入れてお土産にお持ち帰りいただいた。

3）可能性を引き出すプログラムデザイン会議

これらの体験を踏まえ、それぞれの現場、あるいは、プログラムのどんな場面で燻製体験を活用することかできるか、各グループで話し合い、全員に向けて発表した。

自分たちで割った薪で燻材チップを作ったり、森で見つけた木の実で燻製作りをするといったアイディアや、逆に、燻製作りの後に森に出かけて、木の実等の食材や燻材の原料となった樹木を探したり、解説するといったアイディアが提案された他、燻製は環境に関心のない人でも、興味を惹きつける魅力があり、都市部における出張プログラム等フィールド以外での活用ができるといった意見が交わされた。また、獣肉の燻製体験の可能性について、薄くスライスしたうえで、予め十分な殺菌と下拵えをしさえすれば、可能ではないかといった議論もあり、新たな展開が予感できた。

【まとめ】

このワークショップでは、燻製、燻材の作り方を参加者全員が共有し、その活用方法をそれぞれの知見を交えて模索することで、燻製をきっかけに人々に何を伝えることができるのかについて考えた。

燻製作りでは、異なる燻材チップで作った燻製の味や、燻煙の香りの違いを確かめたり、燻製の食材用にオニグルミの殻を割って中身を取り出したりと、参加者1人1人が楽しんで作業できたことから、とても賑やかで楽しい雰囲気となった。

【記録担当者】田渕　絵莉子

WS13

一流を学ぶ…第一印象と名刺交換

実施者： 木邑 恭子・木邑 優子（有限会社グレイスアカデミー）

【概要】

物事を成功させるために大切な「3P」。“Plannning＝計画”と“Performance＝実行”とその間にある“Presentation＝掲示・説明”である。この 80 分ワークショップでは Presentation の中でも基本中の基本である、第一印象と名刺交換に焦点を当て、その技を磨いた。参加対象は自分の技の確認と見直しをしたいと考えている人全員である。一流の第一印象と名刺交換を実践と KP 法（紙芝居プレゼンテーション法）によってレクチャーした。

【実施内容】

1） 導入

東京の大人気の煎餅店「SENBEI BROTHERS」。潰れかけた煎餅店を独自の発想と工夫で「一カ月待ちの煎餅店」におしあげた。『デザインが変われば売れる』つまり『印象が変われば上手くいく、成功する』という話を、実際に SENBEI BROTHERS の煎餅を使って説明した。事例を交えながら、相手に良い印象を与える大切さを講義した。

2） 自己紹介

一つの机を囲んで自分の名前、所属、参加理由を話し、自己紹介を行った。参加理由としては、「正しい名刺交換を学んだことがない」、「自己流で名刺交換をしているので正解を知りたい」という声が多かった。自己紹介後は自分の考える「一流」とは何かを隣り同士で話し合い、全体で共有した。一流とは「その道のプロであること」や「極めていること」という考えが多かった。自己紹介で会場全体の緊張がほぐれていた。

3） 実践

実施者の話を聞きながら、名刺交換の基本的な所作の確認をした。「名刺は名刺入れから出す」、「名刺は立って交換する」、「名刺は訪問をしている側（目下の人）から先に出す」等。そして上司 対 部下の１対１の名刺交換の場面のお手本を見た後に、実践として 5 人と名刺交換を行った。今まで自分が行ってきた名刺交換と異なるところもあり、苦労している人もいたが、何度も練習することでより良い印象を相手に与えることができるよう、丁寧な名刺交換ができていた。また、単に名刺交換をするだけではなく、「珍しいお名前ですね。」や「素敵な名刺ですね。」などと一言添えるだけで、相手との距離がぐっと縮まるということを、参加者自身が実践の中で編み出していた。

１対１だけではなく上司と部下 対 上司と部下の 2 対 2 の名刺交換の練習や、目上の人に部下を紹介するという場面の練習も行った。実践しながらよかったと思うところは参加者全員で共有したり、知恵を出し合ったり、みんなでよりよいものつくろうという姿勢を見ることができた。

また参加者層が大学生から定年退職された方まで幅広かったため、普段はあまり関わることのない世代の交流があり、参加者は非常に生き生きとしていて、楽しそうな様子であった。

【まとめ】

KP 法で「応対成功のポイント」、「マナーとはなにか」、「マナーの重要 3 ポイント」等のレクチャーが行われた。特に応対成功のポイントである『①笑顔』『②友だちになろう（事実、気持ち、想いを汲みとる聞き上手になろう）』『③売ろうと思うのではなく、お役に立とうと思おう』は、参加者も頷きながら聞き入っている様子だった。

最後は参加者一人一人が気づいたこと、感じたこと、学んだことを順に発表した。「おもてなしの心が大切だということが分かった」、「正しい名刺交換の方法が分からず、負担になっていたが、その負担が無くなった」、「名刺交換に自信がついた」、「非常に役に立った」等の声があった。会場は終始和やかな様子で、参加者は積極的に参加していた。普段あまり学ぶ機会のないマナーをしっかりと学ぶことができ、参加者は非常に満足している様子であった。

【記録担当者】西尾 有香音、古曽尾 胡桃

WS14

「水の足跡」ースペース・ウォークを使ってー

実施者： 小河原 孝生 （特定非営利活動法人生態教育センター）

【概要】

私たち人間が、1 日にどれくらいの水を使っているか、すべての生命に欠かせない「水の持続可能性」をテーマに、ウォーター・フットプリントの実態について、スペース・ウォークという方法を用い、体験しながら考えるワークショップ。前日に行われた 10 分間プレゼンテーションのふりかえりを交え、現在の ESD（持続可能な開発のための教育）やインタープリテーションの課題から、改めて環境教育とはなにかを考えた。また実施者が現在行っている活動の紹介や活動している施設の紹介を行った。

【実施内容】

1） 前日の 10 分間プレゼンテーションのふりかえりから現在行っている活動について

はじめに、前日に実施者が行った 10 分間プレゼンテーションのふりかえりを行った。今までの自然教育活動を世論調査等の結果をもとにふりかえり、ESD やインタープリテーションの課題の解説を行った。またこれからの環境教育をどうすれば良いか、プログラム参加者への配慮や環境教育の領域とプログラムの方向性等から解説を行った。参加者は真剣な面持ちで、実施者の話に聞き入っていた。

続いて、実施者が現在まで行ってきた大学・専門学校・中高生向けの研修プログラムの開発や子ども向けの食農体験プログラムの開発等の活動について、写真を用いて解説を行った。また、さまざまなプログラムを行っている写真の解説をし、スペース・ウォークを実際に行っている写真を用い、これから行う体験活動についての説明も同時に行った。

2） 水の足跡を考える

フィールド・ノートを用い、参加者個人で「水の足跡」、主に家庭での水利用と食品による水利用の 2 つの面から推測を行った。はじめに、家庭での水利用についての推測を行い、実際の量の回答を行っていった。回答が発表されると、参加者からどよめきの声が上がった。続いて、食品による水利用についての推測を行った。実際の量の回答をスペース・ウォークの体験活動を通して行うため、ここから外で活動を行うことになった。

3） スペース・ウォークの体験

室内から出て、水の足跡を追いかけるスペース・ウォークの体験活動を行った。水1L を1歩として、どれくらいの水が利用されているかを歩いた数で確認する。本来のスペース・ウォークでは、一定の間隔をあけ歩くのだが、今回は時間の都合上、まとまって歩くこととなった。参加者は歩数を確認しながら歩き、室内で推測した食品による水利用の実際量の回答を確認した。実際の量に歩数が達したとき、回答が書いてある紙を地面に置き、答えあわせと共に、なぜ水がこれだけ使われているのかの解説を同時に行った。参加者は歩数を数えながら、回答の解説を聞きつつ、楽しみながら歩いていた。また体験活動中、実施者によるキープ協会の敷地内にある各キャビンについての説明も行われた。清里ミーティングやキープ協会に長く関わっている参加者からは、なつかしいなどの声があがり、初めて参加した参加者からは、感嘆の声があがっていた。

4） ふりかえり

室内に戻り、体験活動のふりかえりを行った。ふりかえりを行い、なぜ体験活動を行うのか、また体験活動を通して何を感じ、何を見極めてほしいか等の説明を行った。また、最後に今回使用したフィールド・ノートの説明と質疑応答を行った。

【まとめ】

普段何気なく食べている食品や使用しているものにどれだけの水が使われているか、体を使って感じたことで、参加者からは驚きの様子が見られた。最後に、今回行った体験活動の意味を解説、質疑応答を行った。

【記録担当者】 高橋 直樹

WS15

環境・CSR 活動評価チェックリストを使ってみよう

実施者： 瀬尾 隆史（公益社団法人日本環境教育フォーラム）
藤木 勇光(J-POWER 電力開発株式会社)

【概要】

環境活動や企業で CSR を担当する方の支援や、ベテランの方との意見交流を目的とされたワークショップである。このワークショップは昨年度、企業 6 社とジャーナリスト、コンサルトの方の参加を得て、環境活動などを幅広く対象に作られた「CSR 活動推進のためのチェックリスト（CL)」を実際に参加者が使ってみることで、環境活動のプログラムのさらなる改善や別の視点を見つけることや意見交流による CL の改善を目的としたものである。

【実施内容】

まずは、CSR 担当または環境の部門に所属している企業の参加者が各テーブルに一人いるように席を移動しなおした。主にスライドを使った講義形式でワークショップは進められていく。

1）自己紹介

J-POWER グループの概要や企業理念などの説明が行われた。また、2007 年から開始された「エコ×エネ体験プロジェクト」の目的と位置づけの紹介がされた。

2）評価検討会とその後の気づき

「エコ×エネ体験プロジェクト」を進めるうえで、CSR は企業の慈善活動で本業とは別であるといった考え方が会社内にあった。そこで社内での理解獲得や、そのプログラムの改善について他社との知識共有を求め、「評価検討会」の発足に至る。

評価検討会はジャーナリストや CSR コンサルト、企業 6 社によって約半年間、計 7 回開催され、成果として今回使用されたチェックリストが作成された。

3）前提としての曼荼羅図（セオリー）

ここでは円錐図と曼荼羅の 2 つの図を使って説明がなされた。円錐図では企業活動と CSR 活動の対比を行った。曼荼羅とは、主に円の輪のことである。ここでは O を中心とし、ABCD4 つのステージに円を分けたものを曼荼羅と呼び、そのステージごとの評価を循環して行うことによって、自社の CSR 活動のスパイラルアップを目的として作られた。

4）チェックリストについて

ここからは、主にグループでの活動に移っていく。チェックリストは全 220 項目あり、野外活動を含む具体的な行動や活動を適用対象として作られたものである。また、使用者にとって「改善の手がかりを得る」、「気付きを得る」ことを目的として作られたものである。

まずは 10 分程度グループの中でチェックリストに目を通し、確認を行った。次にグループ内で自己紹介を兼ねて、自分の問題意識等の紹介を行った。最後にグループとしての問題意識をまとめて A4 用紙にまとめて発表し、実施者・参加者が討論を行った。

参加者はとても真剣な様子で CL の確認、グループでの意見交換を行っていた。参加者からは「組織の細部を見ていくものにしていったらいいのではないか」、「プログラムの参加者にも責任があるという視点が抜けている」、「工程が決まっていないので混乱する」「活動と CSR のチェックリストを分けたほうがいいのではないか」などの質問が上がり、いろいろな提案や意見交換が行われた。

【まとめ】

今回のワークショップでは環境にかかわる多くの人々が、環境・CSR 活動評価リストに高い関心をもって集まり、参加者同士、終始活発に意見交換が行われた。グループ内で時間いっぱいになるまで話し合い、多方面からの意見に刺激を受けている様子だった。チェックリストも企業やコンサルタントの中で意見交換されながら作られたものであり、今回のワークショップはその裾野が一般の人々にも広がるきっかけになったのではないだろうか。

【記録担当者】鈴木　奈美

WS16

海の森からの贈り物～海藻おしば～

実施者： 野田　三千代・箕島　恵利（海藻おしば協会）

【概要】

海藻おしばとは、海の植物としての「海藻の美しさ」を糸口とした環境啓発活動。海藻のつくる海の森のレクチャーと、漂着海藻を使ったハガキ1枚のアート作品制作の２本立てで、子どもから大人までを対象に行っている。「海藻おしば」は海藻の宝庫・伊豆半島の南端に位置する筑波大学下田臨海実験センターの研究室で生まれた。海藻の色と形を美しく表現できるように従来の海藻標本を改良し、更にアートを創出。アートと抱き合わせた、海と地球環境問題を理解するサイエンスコミュニケーション。

【実施内容】

1）レクチャー

「海藻」についてどのように教えているのかを再現した。これからの講座に興味を持ってもらうため、日本人にとって食品として食卓に上る、お馴染みの海藻を導入として、ワカメを中心に海藻標本を見せて身体全体の色、形を説明。その他の美しい海藻標本も多数見てもらい「海藻は美しい」で引きつける。

2）「海の森」の DVD 鑑賞

海の森について説明する約 11 分間の DVD を鑑賞した。内容は海の水の循環から始まり、海の森としての海藻、海草、植物プランクトン。そして海の森の役割と現状という流れである。

3）海の森についての話

日本全国各地の海の森の映像を見ながら、「海の森の役割」と現状「海の森が減少している原因」について解説した。光合成などの科学的な専門用語やしくみがわからなくても理解できるように、参加者の中から海藻になってくれる人を海の森の海藻にしたてて解り易く解説。海の中で揺られている海藻のように体をうねらせる実施者が、汚濁物を身体で受け止めて多様な生物を育む様子を再現。海水も浄化してくれる海藻に対して「どのような気持ちであるか」と、インタビューをすることなどで笑いも交えながら、海の森のしくみについての理解を深めた。

4）実物使用海藻の紹介

各テーブルへおしば作りに使用する海藻を配布し、材料となる海藻の解説を行った。シーズンである春に伊豆半島で採集したアカモク、トサカノリ、ホソバノトサカモドキ等の 10 種類の海藻を使用。普段親しんでいる海藻等、選別にも工夫がされていた。

5）作品紹介

誰でもアーティストになれる海藻おしば作品のこれまで作られたものをパワーポイントで紹介した。人気のキャラクターや季節ごとのグリーティングカードなども海藻おしばで表現することができる。具象にしなくても海藻を広げただけでも美しいので、絵が苦手な人でもアートに対する自信がつく。

6）海藻おしばづくり

実施者のデモンストレーションを通して、文字の作り方、海藻で表現するときのアドバイス等を参加者に実演した。メッセージを書き、はがきを水に浸す。水を張った容器に海藻を入れ、使用海藻を選ぶ。カード上に海藻を拡げて置き、爪楊枝で広げながらデザインする。参加者は終わった順に作品を提出し、記念品の海藻おしばの栞を貰っていった。

【まとめ】

このワークショップでは、子どもから大人まで幅広い参加者を対象としている。今回は大人だけの参加だったため、子ども対象の手法も紹介しながら解説した。海藻の知られざる内容の解説をまじえることで、これまでの海藻に対するイメージを変えてしまう奥の深さがあり、日本人が昔から食品として接している海藻が海の環境に多大な働きをしていることに気づき、新鮮な驚きや感動となる。

海での環境教育の手法が限られているなかで、陸と海の森の繋がりはもちろん、参加者同士、またはワークショップ実施者との交流にも繋がっていた。

【記録担当者】　樋口　桃子

WS17

告知・広報に活かす“伝わる”、“伝える”文章講座

実施者： 東　麻吏（外遊び tete）

【概要】

自分の思いを完璧に伝えることは不可能であるということが大前提である。しかし、本当に大切なことは伝えなければならない。そのために必要なのは、誰が読んでも分かるような文章を書かなければならないということである。自分の思いを伝えるためのノウハウを、レクチャーを交えながら実際に告知文を書くことを通して考えた。

【実施内容】

1）自己紹介

参加者は 1 人 30 秒で自分の名前、所属している組織、好きな食べ物について発表する自己紹介を行った。所属の紹介をする人や好きな食べ物について語るなど様々な人が存在した。始まる前のこわばっていた参加者の表情から笑顔がこぼれ、参加者の表情が明るくなったのが見て取れた。

2）講義①

「伝える」とは自分の書き方や言い方次第で変化する。「伝わる」とは相手の受け取り方で変化する。したがって、自分の伝えたい思いをなるべく完璧に伝えるためには、誰が読んでも分かるような文章にする必要がある。そのためには「文章」を「書く」までの作業が極めて重要になる。その「書く」作業は主に 5 つである。①なんのために書く（伝える）のか、②どんな媒体（書く場所）を使うのか、③誰（どんな立場の人）が読むのか、④読む人はどんなとき（どんな気分で）に見るのか、⑤どんなことを伝えたいのか、以上 5 つである。

3）告知文を書いてみよう

講義①を踏まえて、配布されたワークシートにある「目的」「媒体（各場所）」「誰が読む」「読む人はどんなときに見る？」「文章」の欄へ記入する形で、実際に告知文を書いた。「目的」は自分の所属団体での活動、「媒体」は Facebook や団体の HP などのネットが媒体にされることが多かった。参加者は真剣な表情で丁寧に記入していた。

4）講義②

3）で記入したワークシートをもとに、レクチャーを挟んだ。告知文は対象者、書く場所（媒体）によって内容は変化する。そのためにそれぞれの内容を細かく深掘りすることが重要である。例えば、実施者が主催している「外あそび tete」が行う「おやこ山えんそく」の告知文を書きたい。その際、「誰が読む」の欄に「鎌倉のまちおこしイベントに来てくれた人」と書いたのであれば、それはどのような人なのかを想像し、「鎌倉に興味がある人」「鎌倉が好きな人」「何かレジャーが好きな人」「週末のお出かけ先を探している人」というように、人物像を細かく分類していく必要がある。

また、「どんなときに見る」のかという欄には媒体のレイアウトを工夫することや、PC サイトにアップしたものをスマートフォンでも閲覧できるようにするなど、工夫をする必要がある。特に後者の工夫が重要だ。なぜなら、今日の人々はスマートフォンから集める情報が 6 ～ 8 割のサイトが多いからである。その際には気をつけるべきことはウェブサイトや SNS での「書き分け」である。例えば、自分の所属する団体のウェブサイトと Facebook イベントページに投稿した場合に、前者では自分たちのことを知っている人や、過去に関わったことのある人が見ることを想定する。一方、後者では自分たちのことを知っている人やそうでない人が見る両方を考慮して、イベントの詳細の他に団体の情報を必ず入れる必要がある。また、SNS に書き込む場合には自分たちしか知らないような単語を用いないことが鉄則である。閲覧した人すべてが分かるよう細かい配慮を施した文章を書かなければならない。タイトルをつける際には、読む人が欲している情報に適していると思う言葉しか使用しない。そうしなければ、人は一瞬で閲覧する価値のある記事か否かを判断するため、タイトルに興味を示さなければ誰も見ようとしなくなる。実施者が模範的な告知文の書き方をレクチャーする講義だったが、参加者は自分の書いた告知文と比較しながらその講義を聴いていた。

【まとめ】

このワークショップのねらいは「自分の思いの伝え方」である。告知文の内容や対象ごとに詳しく掘り下げて考える作業が極めて重要になる。また、スマートフォンで閲覧できるように発信者が工夫することも重要である。参加者は、どのようなことに気をつけながら告知文を書かなければならないのかという観点に絞って、講義や活動を通して学んでいた。

【記録担当者】 光岡　駿

WS18

環境教育と家族

実施者： 中澤 朋代（特定非利活動法人日本エコツーリズムセンター）
藤村 哲（体験創庫かけはし）

【概要】

環境教育的ライフスタイルの一つの実践ともいえる自然学校は、活動が実施者自身の家族の在り方や暮らし方と連動しているケースが多くある。変わりゆく時代と目指すライフスタイルについて、「家族」という視点で考えるワークショップとなった。

これからの将来を担う子どもたちが、どのようにして地域で暮らしていけるのか。自然学校が実践している、野外教育・環境教育の事例を紹介しながら、配布されたワークシートをもとにグループトークを中心に進められた。

【実施内容】

1）自己紹介・グループトーク

参加者同士が自己紹介もかねて、家族に対する考え方や、子どもを授かった時のタイミングなどを紹介し合った。これからの社会と環境教育はどのように進んでいくのだろうか、などキーワードをピックアップ。3 つのグループに分かれ、それぞれ予測を立てながら意見交換を行った。

2）実施者によるレクチャー

実施者の住んでいる、長野県松本市の暮らしについて話がされた。実施者は夫婦で自然体験や環境教育に関わる活動を、地域で行っている。その活動で重点に置いていることは、子どもたちが自然に触れ合う機会にすることはもちろん、子どもと地域の人たちが一緒に活動できることである。今回は農業をはじめとした、暮らしに関わるプログラムが紹介された。

3）ワークシート作り

ワークシートを配布し、自身の生い立ちから育った環境も含めて見つめなおした。項目としては、下記の通りである。

①自分の受けた自然の体験や思い出。
②自分の持つ自然の知識
③自分の環境予測
④自分が望む未来の環境
⑤自分にできること・現在取り組んでいること。

それぞれワークシートに書き出し、グループで共有した。

川では魚釣りやザニガリ釣り、山ではキャンプや山菜、きのこ採りなど、自身の自然体験の思い出に花が咲いた様子だった。

4）課題共有・自由討論

ここまでのグループトークで出された意見を踏まえ、これからの社会や家族のあり方が変化する中で、環境教育がどうあるべきなのかを話し合った。参加者からは、「家族で農的暮らし」「産まれたときから」「後継」「災害教育」「誰でもひとつできることを！」「縄文的平和」「ほんとに遊ぶ」「自由な時間」という 8 つのキーワードが発表された。

【まとめ】

このワークショップを通して、私たちが自然を大切にし、この先の子どもたちにものびのびと良い自然環境で成長してほしいという想いが感じられた。

人と自然をつなぐ役割を家族という視点を通じて、これからどのようにやっていく必要があるのか、積極的に意見が出された。

【記録担当者】 関野 真子

WS19

アクティビティを再生する

実施者： 後藤　清史（野たまご環境教育研究所（野の塾　工房たまご））

【概要】

使っているアクティビティは、果たして今のままでいいのか。昔から使われていたアクティビティを後生大事に使い続ける。現在のニーズに合わないことに気づかず改良しない。見聞きしただけで展開し、内容を確認しないなど様々な問題提起のもと、どのような視点からアクティビティを捉え、改良（アレンジでなく、あえて再生と述べていた）すれば良いのかを簡易なアクティビティを例に、改良の工程を追体験し、改良前後のアクティビティを比較することで、その効果を確認した。

【実施内容】

1）アクティビティを再生するとは…

アクティビティをクラシックカーに置き替えて、「一見、問題はないように見えても、点検や改良することなく使い続けて良いのか？」過去の名アクティビティだからと、そのまま使っては現状には合わず、十分な効果が得られないかもしれない。また、派手さや楽しさの付加など、思い付きや統一感のないアレンジでは効果を発揮できないのでは。目的を生かしつつ、今に合うものに作り上げる「再生（レストア）する」ことが大切であると加えて説明された。

2）自己紹介・参加動機の確認

このワークショップを選んだ理由を書き出し、自己紹介とともに全員の参加動機を共有した。

3）アクティビティ体験

全員と握手したあと、「〇〇人で集まれ」という活動を行った。活動では、幾人かがあぶれてしまう場面があり、実施者のどんな気持ちかなどの問いに、あぶれた人からは、「悲しいです」などの答えが返っていた。次に、お互いの人となりを知る活動をおこなった。

4）アクティビティの分解

先に行った「〇〇人で集まれ」例に、パーツとして環境学習・活動的・会話（声）・身体接触・笑顔・ゲーム性・注目・思考・主体・参加度などに分け、それぞれ有無とスペックを確認。例えば「会話」では、会話の有無だけではなく、その度合や深度の確認を具体的に行った。その上で、どう改善すれば良いかを意見を出し合い、考えた。パーツの確認の後、実施者がどのように考え、どこに注目して変更を加えたかを述べ、実際に再生（改良）後の活動を体験した。

4）再生したアクティビティ体験

3）の後、「〇〇人（レストア版）」を体験。活動に付加された点は、グループができたら手をつなぐ、ヒィーハーという掛け声とともに座るという 2 点であった。不思議と笑顔や声も増え、全員が楽しめているという印象を受けた。あぶれた参加者も笑っていた。

5）スペック表作成

交流・会話・環境学習・安心・安全・体験しやすさ・扱いやすさ・笑い・活動的などの項目を入れた 5 段階評価のレーダーチャートを再生前と再生後の活動で作成した。それぞれのチャートを比較して見えたことは、身体接触と会話の 2 つのパーツを変化させただけだったがチャート全体が良好に変化していた。

6）振り返り

チャートを見つつ振り返りを行った。チャートに付加できそうなスペックやチャートが変化しないスペックについて意見が出された。また、パーツの追加が可能かという点についても意見が出された。今回のワークショップを通じ全員が、再生によりアクティビティの効果が良好に変化することを実感できた様子であった。

「変えたいのは外見でなく、効果」であることを確認し、質疑応答の後にワークショップを終了した。

【まとめ】

アクティビティを自分が使いたいものに変えていくためには、アクティビティを構成するパーツを知る必要がある。思いをいくつも重ねるよりも、目的を明確にして改良することが大切。また、ゲーム性を増すと活動は面白くなるが、ねらいが薄れる。改良はシンプルにする。学びに罰ゲームは必要なのだろうか？などの解説があった。パーツに分けてスペックをとらえ、改良することでいろいろな目的に合致するアクティビティを作り出せる。

「変えたいものは外見ではなく、効果」そのためにもアクティビティの性能を理解して改良する必要がある。この方法は、プログラムの企画などにも適用できる。

【記録担当者】　岩崎　智佳

WS20

野外での事故に備えよう！ 「野外・災害救急法」の体験

実施者： 本杉 美記野（一般社団法人ウィルダネスメディカルアソシエイツジャパン（WMAJ））

【概要】

「野外・災害救急法」とは、医療機関につなぐまでに時間がかかる状況下で、命を守るための救急法である。屋内で 50 分ほど基本的な人体構造や都市部と野外の救急法の違いなどの解説、2 人 1 組になって傷病者の身体状況の確認方法や確認する体の部位などを詳しく学んだ。その後屋外で 30 分、2 人 1 組になり、野外で使える救急法及び評価技術体験を行った。

【実施内容】

1）レクチャー

まずはレクチャーの時間。都市部での救急車の到着は平均で約 8 分といわれている。 しかし都市部であっても万が一何かあった場合、必ずしも 8 分で救急車が来るとは限らない。救急車や救急隊が来られない状況や、病院までのアクセスに長い時間を有するときのことを「ウィルダネス状況下」という。例として、都市部では大規模な道路整備のため遠回りしなければならず、到着に遅れが出る状況であったり、また野外活動で挙げられる例として、山中での散策最中での事故で、日暮れが迫っていたり、電波が悪くなかなか連絡が取れない状況などが挙げられる。そんなウィルダネス状況下のときに役立つのが「野外・災害救急法」である。

2）野外救急法とは

「酸素化」を担う重要器官として、呼吸器系・循環器系・神経系の 3 つがある。酸素化の過程を阻害すると生命に関わるため、救命連鎖として傷病者に遭遇した場合、直ちに行う必要があるのが「安全の確保」と、「レッドフラッグのチェック」の一般的な救命救急法と通報である。

レッドフラッグのチェックとは、たとえば循環器系では、心臓の動きや大出血をしていないかなどを確認し、心臓が止まっている場合は心肺蘇生法で酸素化を維持し、また大出血を起こしている場合は出血のポイントを強く圧迫する。出血しているのにレインウェアを着ていて気づかない場合もあるので、大動脈などがある首・脇・足の付け根など念入りにチェックすること。また脈拍もチェックする。

呼吸は腹と背中を触ってチェックと気道が通っているか確認する。呼吸が止まっている場合は心肺蘇生法で酸素化を維持するよう努める。神経系では意識があるか、名前を呼んだりしてチェックする。意識を失っていると舌が下がって喉をふさいでしまったり、嘔吐物で喉を詰まらせたりする可能性があるため回復の体位を取らせる。また傷病の原因から脊椎損傷が予想される場合は動かさないことが必要になる。

以上が一つでも引っかかった場合、「レッドフラッグ」となり、緊急的な事態となる。

3）実践

屋外に出て 2 人 1 組になった。一人は傷病者役で倒れこみ、もう一人が実際の状況を想定しながら倒れている人に声をかけ意識があるか判断し、その後頸動脈が動いているか、息をしているか背中とお腹を手で挟んで動きを確認する野外救命作業を、1 人 2 セットずつ行った。

4）二次評価

レッドフラッグが該当しなかった、もしくは処置が完了した場合、次に救急車待つ間にできることとして、処置の継続及び看護と情報収集（二次評価）である。情報収集を行うことによって、救急隊がその情報を参考に重要度と緊急度の判断を行い、適した医療機関に搬送することができる。情報収集として全身をくまなく確認し、もう一度出血の確認やバイタルサイン（脈拍）の傾向、傷病者情報の聴取を行い、問題リストを作成する。そして傷病に優先順位をつける。

【まとめ】

救急法の実践では、参加者は真剣な眼差しでワークショップに取り組んでいた。参加者から実施者に対して「こういう場合は？」などという具体例を出して救急法を自らすすんで学んでおり、参加者はワークショップの内容に非常に満足している様子だった。

【記録担当者】 山田 真希

WS21

いま「公害教育」を考える

実施者：西村　仁志（広島修道大学）
栗本　知子・林　美帆（公益財団法人公害地域再生センター（あおぞら財団））

【概要】

公害教育は、すでに過去のものと思われていること多いが、実はまだ「公害問題」は終わっていない。例えば、「福島の原発事故」も公害問題の1つである。このワークショップでは、公害問題の歴史と現状を学び、それぞれの感想をグループごとに共有し合い、公害教育の可能性について考えた。

【実施内容】

1）自己紹介カード

参加者全員に紙を配り、名前・所属・このワークショップを選んだ理由・このワークショップに期待することを書き、向かい合わせたテーブルの 5 人ほどのグループで共有した。参加者たちは、自己紹介をしていく中で会話が弾み、笑いも起こり、この自己紹介タイムで表情が緩んだ。その後、全体でも 1 人 20 秒ほどで自己紹介を行い、どんな参加者がいるのかそれぞれ確認し合った。参加者の中には、「公害問題についてよく知らないので興味がある」「小学校教員として子どもたちへ公害について教えるため、もっと理解を深めたい」という人もいた。

2）公害教育の歴史についてのプレゼンテーション

スライドで公害教育の歴史についての解説。四大公害裁判をはじめ、公害冬の時代、等一通りの公害の歴史をふりかえった後、あおぞら財団が設立されるきっかけとなった西淀川公害裁判について焦点が当てられた。また、あおぞら財団の活動である、公害における様々な立場の人たちの意見を聞く「スタディーツアー」についての経験が語られた。

3）感想の共有

2）のプレゼンテーションを踏まえて、キーワードを各自書き出した後、8 分間グループで共有し合う時間を設けた。この話し合いの中で、参加者からは「公害についてもっと知りたい」、「公害を出してしまった会社・原発を作ってしまった会社が悪いのではなく、そうせざるを得ない経済成長優先の風潮を作ってしまった社会が悪いのではないか」という意見がでてきた。

また、参加者から福島の公害教育について質問があった。これに対し、実施者は以前福島の人たちが西淀川公害の患者さんたちと交流することで、自分たちがどのような状況に置かれているか理解できた、という経験を語った。

4）グループトーク

「公害の視点を環境教育に取り入れることでどんなメリットがあると思うか」というテーマについてグループで話し合い、全体で発表した。

【まとめ】

参加者の中には、公害問題についてあまり知らないという人も多かった。しかし、プレゼンテーションの後には、公害教育は現在もまだ終わっていないこと、公害問題について考える際は様々な立場の人の意見を取り入れ、公害汚染を出した企業だけを責めるべきではない、という意見も出てきていた。参加者はこのワークショップを通じて、公害教育に対する新たな見方を持つことができるようになった様子だった。

【記録担当者】　樋口　桃子

WS22

「いつもの暮らし」を環境教育プログラムに！

実施者：新津　里子（特定非営利活動法人都留環境フォーラム）

【概要】

都留環境フォーラムが実施している独自の環境教育プログラムの紹介を、パワーポイントを利用して 80 分行った。自分たちがその日行う予定だったものや、普段やっていることである日常生活＝「いつもの暮らし」のことを子どもから大人までの幅広い年齢層の方々に実際に体験していただき、自分たちの日常生活を体験してもらうことによって参加者の日常に変化をもたらすきっかけづくりや、暮らしの実施者になるきっかけづくりなどのプレゼンテーションを行った。

【実施内容】

1)　自己紹介

参加者同士の自己紹介を行った。内容は「出身」「どういう経緯で清里ミーティングに参加したのか」などを参加者一人ずつ行った。参加者＝お客様ではなく、一緒に活動する仲間というような距離感を意識し、疑問や意見はその都度、活発に出された。

2)　都留環境フォーラムの実施しているプログラムについて

パワーポイントを使って活動の写真を見せながら、都留環境フォーラムの経歴と、現在行っているプログラム内容が説明された。都留環境フォーラムでは、「持続可能で豊かな暮らし・まちづくり」を実現するために以下のことを行っている。

① 在来馬の伝統耕作プロジェクト
② 在来作物の普及事業
③ 循環型農業
④ 出版部門「里創部」
⑤ いつもの暮らしの事業 ： いつもの暮らしの事業部は 5 月からスタート

環境教育のイベントは非日常的ものがほとんどであるが、「いつもの暮らし」は身近なものであるため、より環境教育を身近に体験することができる。都留環境フォーラムの「いつもの暮らし」では、自給自足でモノ(野菜、米、トイレ、馬小屋等)を 1 から作る独自の生活を体験してもらう環境教育の事業を進めている。

具体的には、都留環境フォーラムの事務所や田んぼ・畑・馬の世話を実際に体験するワークショップ事業を行っており、10:00～16:00 の 1 日体験ワークショップで 4,000 円、1 泊体験型ワークショップで 6,000 円の参加費で体験してもらっている。「いつもの暮らし」の体験型ワークショップは、特に日によって「これ」をやるといった特別なイベントは設けておらず、その日行うワークショップは当日に内容が決まり、参加者と一緒に行う形で行われている。たとえば畑の草刈りを行う日もあれば、猟師さんが捕って置いていった鹿をさばいて食べる日もあったり、飼っている馬や羊の世話をする日もあったりと、比較的突発的なことが多い。その中でも、食事は都留環境フォーラムで飼っている鶏からとれた卵や、育てた野菜や果物を食べて生活しているため、まさに地産地消の生活を実際に体験することが可能である。

3)　意見交換

最後に質問や意見交換を全体で行った。都留環境フォーラムの「いつもの暮らし」と一般家庭の暮らしの差異や、「いつもの暮らし」を行う意義などについて意見交換がされた。

【まとめ】

このワークショップは、実施者による都留環境フォーラムの環境プログラムの紹介を中心に進めながら、参加者からの質疑応答や意見交換を行った。持続可能な暮らしとは何か、プログラムとして行う意味、効果などを参加者と実施者が真剣に話し合う場となった。

【記録担当者】 山田 真希

WS23

「自然から学ぶ場と人の全国フォーラム」中間検討会

実施者：森　高一（特定非営利活動法人日本エコツーリズムセンター）・
木邑　優子（有限会社グレイスアカデミー）・高木　幹夫（日能研）・稲城　瑞来（日能研）
小林　孝之助（アウトドアチャレンジ協議会）

【概要】

全国フォーラムの紹介の後、「①自然から学ぶこと、もの」「②自然からしか学べないこと」「③人が介入することで学ぶこと」の 3 つをテーマに設定し、それぞれディスカッションを行った。テーマ①については他のテーマをディスカッションした後、再度考えることで、また違う考えが出される様子が見られた。ディスカッションはグループで行い、テーマごとに全体で内容を共有した。

【実施内容】

1)　全国フォーラム紹介（15 分）

タイトルの「自然から学ぶ場と人の全国フォーラム」は、過去の清里ミーティングや、ミーティング以外の場でも話し合いがこれまで進められてきた。これまでの過程と、エントリープロジェクトの募集が始まる旨の紹介を挟むことで、全体との情報共有がまず行われた。

2)　自然から学ぶこと、ものとは？（20 分）

「①自然から学ぶこと」について、各グループでポストイットと模造紙を使ってブレインストーミング（アイディア出し）を行った。自然や環境に携わっている者同士、白熱したものとなった。

3)　自然からしか学べないこととは？（20 分）

「②自然からしか学べないこと」についてのグループディスカッション。「①自然から学ぶこと」をさらに絞り込み、考えを深めていった。そこでは、「ありのまま」や「相互依存の美しさ、はかなさ」、「とらえきれないもの」などの意見が出された。それぞれの考えにその人の思いが感じられた。

4)　人が介入することで学べることは？（20 分）

「③人が介入することで学ぶこと」についてのグループディスカッション。インタープリターやガイドが自然と人に介入することで、学べることは何が考えられるか話し合った。「共有すること、シェアすることを学べる」「安全の中で学べる」「第三者がいることで共有し、深め、さらに広げていくことができる」という意見が出された。そして、そのプログラムの意味や意義、達成感を伝えることや、知識を学ぶこともできるのは、「人が介入することで学ぶこと」の中で特に大きい。

【まとめ】

「自然から学ぶ」ことについて、3 つのテーマで話し合った。様々な切り口から考えることで新たな気づきや考えが生まれた様子だった。各テーマで話し合った内容を全体で共有する時間をとり、参加者同士の意見交換も活発だった。最終的なキーワードとして、「恵み」「本物」「完璧さ」「確実性」、また逆に「とらえきれない不確実性」というものが出された。各テーマは各個人の考えや、どのような背景から考えるかによって、答えは変わる。どれも間違いはなく、正解もない、それが自然というものである。そのような自然からの学びを考える、そして共有していく場になった。

【記録担当者】　中西　恵基

WS24

SDGs でつなげる地域と活動ワークショップ

実施者： 尾山　優子・高橋　朝美（一般社団法人環境パートナーシップ会議）

【概要】

SDGs とは、「持続可能な開発目標（Sutainable Development Goals）」の略称で、2015 年に終了したミレニアム開発目標（MDGs）に続く「ポスト MDGs」に関連して、環境の持続可能性確保に重点を置いて検討されている国際目標のことである。その SDGs の 17 の目標のなかで自分や所属団体の活動を関連づけ、地域の課題を見出し、地域の課題解決への糸口を、グループディスカッション等を通して考えるワークショップである。また、このような考え方を持つ人がいるのか、このような活動をしている人がいるのかという事を知り、参加者の新たな出会いの場となることがこのワークショップの目的である。

【実施内容】

1）実施者の自己紹介

このワークショップについての簡単な説明と実施者の所属団体である一般社団法人環境パートナーシップ会議についての紹介を行った。

2）ワークシート記入

SDGs の 17 の目標の中で、自分もしくは自分の所属団体の行っている活動に最も関わりの深いものを 3 つ選び、ワークシートに貼る。この際に重要なことは直感で選ぶということだ。参加者は悩んでいる様子だった。

3）85 問質問ノック

SDGs の 17 の各目標に対し、関連の深い課題が 5 つ設定されている。それら 85 の課題について、自分の活動地域と照らし合わせ「あてはまると思うもの」、「頻繁に話題になるもの」にチェックを入れた。そのチェックが最も多かった目標をワークシートに貼り、「困っている人、動植物」「影響を受けている人、動植物」について思いつく限りワークシートに記入した。これを行うことで地域の課題が見出され、自分の考えている以上に課題は多いことに気づいた。

4）グループディスカッション

「困っている人、動植物」「影響を受けている人、動植物」を助けるアイディアを、自分の行っている活動の視点から 5 分間考えた。その後 4 人ずつグループに分かれ、アイディアを共有した。共有の際は付箋を 2 色用意し、新たな提案がある場合は黄色、疑問はピンクに付箋に書き記し、自身の活動内容を紹介しながら地域の課題やその解決策についての話し合いを行った。

立場や分野の異なる人たちとのグループワークとなり、自分とは違った視点から課題解決へのアプローチの仕方を知ることができ、課題解決へのより高い水準の手立てがあることを見つけられた様子だった。

5）アイディアの共有

各グループの面白い課題解決のアイディアを全体で共有する時間をとった。例えば、過疎の問題がある地域でガールスカウトを行っている参加者がいた。その参加者はどうにかして町おこしを行いたい。そのためには地域の良さを自分自身が知ることが第一歩である。そして、その良さを PR する必要があるなどの意見があげられた。

【まとめ】

このワークショップのねらいは「自分の活動の課題を知る」「地域の課題を知る」「課題解決のアイディアを考える」という 3 つの柱から構築されている。

参加者はワークショップ全体を通して、自分や地域についての課題と真摯に向き合い、今後、人、動植物、環境との共生についての考え方を深めることができ大変満足そうな様子であった。

【記録担当者】　光岡　駿

WS25

銀粘土で作る リーフモチーフの純銀アクセサリー

実施者：半田 清昭・宇土 幸助（特定非営利活動法人純銀アート協会）

【概要】

このワークショップでは、銀粘土（純銀の微粉末と水、結合剤を合わせた粘土状の純銀素材）を利用して、世界に一つしかないオリジナル純銀アクセサリー作りを行うことを通して、「環境クラフト」としての銀粘土に興味を持ってもらうことを目的に行った。

【実施内容】

1）準備

まず、参加者は 4 人ずつ 1 テーブルに分かれ、必要な道工具や資料の配布を行った。

2）銀粘土の説明と紹介

銀粘土の説明と、銀粘土でできたアクセサリーや置物の完成したものを紹介した。銀粘土に含まれる銀の含有量は 95%。（焼成後の完成品は 99.9%以上の純銀作品となる）限られた資源を有効利用したクラフト素材として活用されている話がされた。

3） 純銀アクセサリー作り

純銀土の特性と制作にあたってのポイントと形を整える工程の説明を受けた後、参加者はテーブルで各自制作をはじめた。
銀粘土を取り出すポイントはくるくると俵型にとり出すことである。取り出した銀粘土は、手で丸くこねてから成形していった。

その後、リーフモチーフのカギとなる葉を選んでもらい、銀粘土に押しつける作業を行った。葉脈がしっかりとした葉を選ぶことが綺麗な純銀アクセサリーを作るポイントであり、制作者のこだわりや個性が出る部分である。

葉を押しつけたらそのままホットプレートで乾かし、軽く形を整える程度にやすりで削り整えた。この作業は銀粘土が割れたり、ひびが入ったりしやすいため、参加者は真剣に、大切そうに削っていた。

整え終わったらアクセサリーにするための穴をあけて、電気炉（直接火が出ない焼成用の機械）に入れて 800 度で 5 分程焼成すると金属になり、ステンレスブラシを掛けると、すぐに色が銀に変わり、参加者は驚きと感動で声を上げていた。

4）銀のリサイクル

最後に、使ったティッシュなどのゴミを分別した。分別方法は、銀粘土に直接触れたものと、触れていないもの。直接触れたものはリサイクル銀に、触れてないものは一般ゴミに分別をした。少しでも銀がついているものはリサイクル銀として扱うことができる。

【まとめ】

参加者ひとりひとりが、世界に一つだけの自分のオリジナルの純銀アクセサリー作りを楽しい雰囲気で行った。銀粘土の変化の様子に驚きや感動の声をあげたり、作業をしながら参加者同士で交流を深めたり、お互いの完成した純銀アクセサリーを褒めあったりと、参加者同士の交流も深められた。

「銀粘土」は雨の日などに屋内で行う環境教育の手段とするのはもちろん、貴金属リサイクルや環境問題、ごみ問題の素材としても活用されることが勧められた。

【記録担当者】 田渕 絵莉子

WS26

幻想は捨てよう！NPO と行政のミゾを埋める 80 分

実施者： 數井　美智子（自然倶楽部 I（アイ））・大西　知芳（京都やましろ環境教育ネットワーク）

【概要】

行政と NPO の“協働”の取組が提唱され、その効果や必要性が謳われて久しい。協働事業も増え、行政と関わろうとする NPO や、逆に NPO と繋がろうとする行政も実際に増えている。しかし、組織の成り立ちも違い、互いのことを知らないがゆえに誤解や無理解、過度な期待を持つなど、協働を進める上でネックとなることも多く、双方が期待するような効果が得られなかったり、一方に負担を強いることになったりといった結果、ますます信頼度の低下や誤解を生み、マイナスのループに陥るケースが散見された。

そのような中で、行政・NPO・中間支援組織に在籍した経緯を持つ実施者だからこそ見える課題があり、解決につながるコツがあり、両者の手を繋ぐ橋渡しとなり得ると考え、『行政と NPO の協働の推進』の一環となることを目的とした。

【実施内容】

1）NPO と行政について

まず実施者から、NPO と行政が協働していくためにはどういう問題点があるのかという話がされた。共通認識として『協働』についての定義、「行政と協働する NPO の 8 つの姿勢（日本 NPO センターHP より）」、「NPO と協働する行政の 8 つの姿勢」の紹介をした後、今回の主体である『協働について困ったこと』を参加者が書き出した。

実施者にとって予想外だったのは、NPO ではない立場の方や行政との協働で困った経験の少ない方が多かったこと。かわりに企業の立場の方や、NPO として活動を始めたばかりの方など、多角的な視点からの『協働』への思いや考えが出された。その中から1つの意見について全員で話し合い、NPO の立場や他の事例の紹介を行った。実施者が事前に行った行政へのリサーチの結果についても紹介し、「協働のための行動」を項目ごとに各自で書きこめる用紙が配布された。リサーチは、①困った点、②　考えられる原因と解決方法、③　行政の反省点　など。

2）　考える・取り上げる問題を決める

１人１枚紙とペンを配布し、自分が NPO と行政について疑問に思っていること、または困っていること等を紙に記入してもらい、壁に並べて貼り付けた。その後、1 人 2 枚ずつ小さなシールを配布し、自分が興味のある内容が書いてある紙にシールを貼っていき、1 番シールが多かったものを今回とりあげる問題とした。

3）グループワーク

2）で出された「環境 NPO/NGO が自立できるようになるにはどうすれば良いか（助成金の有効活用）」という問題について、3 つのグループに分かれて話し合いを行った。学生だけのグループもあり、聞きなれない助成金という言葉に少々困惑していたようだったが、実施者がヒントを与えることで話し合いが進んだように感じた。その後、どのような話が出されたかをグループごとに発表した。収益があれば助成金には頼らなくてもよい。ではどうやって収益をあげれば良いか。会員から会費を取ればよいのではないかという意見や、人件費をどうやってまかなうか。加えて NPO、NGO の就職は魅力的なのかという意見も上がっており、議論は盛り上がった。

【まとめ】

今後、NPO の意見と行政の事前リサーチでの意見の付き合わせの機会を改めて設けたい。そして、その結果を事前リサーチした行政職員にフィードバックすることにより、行政側の NPO への誤解を解き、理解をすすめ、先入観の埋め戻しができると考えている。今回のワークショップに関わった人達それぞれが、自分の所属する組織に伝達し、組織としてのやり方を見直したり、考えを修正したりしていただくことで、少しずつでも浸透していくと考えている。実施者の想いを伝えてワークショップは終了した。

【記録担当者】　岩崎　智佳

WS27

火を囲み、みんなで作る「居場所」つくり

実施者： 谷口 哲郎 ・ 小暮 香織（特定非営利活動法人つがる野自然学校）

【概要】

清里ミーティングから発した「森の女子会」は、本格的に「森カフェ」として、幼児から大人まで幅広い人が集まるコミュニティとして育った。このワークショップでは、森カフェを実際に体験し、場所づくりや関係づくりを考えるヒントを提供した。

【実施内容】

1） 森カフェについて

まずは今回のテーマである「森カフェ」について説明がされた。「森カフェ」は 2014 年の清里ミーティングで実施した「森の女子会」ワークショップが発端である。「森の女子会」ワークショップでは近年の山ガールや森ガールなどの流行りで、一時的に自然環境などへの無関心層を取り込むことができ、今後もアウトドアブームを維持し、継続・発展させていくための方法を検討した。それを踏まえ、2015 年よりつがる野自然学校では子どもから大人までを対象とした「森カフェ」を自主事業として開始した。

「森カフェ」のキーワードとして 1. 森での活動、2. 非日常体験、3. 選択する自由、4. 話しやすい空間、5. 地元コラボ、以上が挙げられる。今回はその森カフェ体験として、清里のフィールドで行った。参加者は火おこし・焚き火グループと、野外調理グループに分かれ、グループごとにおおまかな作業工程が共有された後、各グループ活動となった。作業のなかでは、グループに分かれたものの参加者同士、グループの枠を超えて協力し合う様子が見られた。

2）火おこし・焚き火グループ

焚き火ではマッチと薪、枝を使用して、火をおこした。実施者よりマッチに限りがあることを伝えられると、参加者はいかに一発で火をつけるのか話し合いが行われた。参加者の中には「こんなの簡単だ」という声も上がっていたが、実際は最初の種火が大きくならず、なかなか一度では火がつけることができなかった。経験者からアドバイスをもらいながら、無事に火をおこすことに成功した。気温が低いこともあり、参加者は火の周りで談笑しながら過ごしていた。

3）野外調理グループ

野外調理では、チョコレートフォンデュとプディングを作った。チョコレートを「火おこし・焚き火」グループのおこした焚き火の上に鍋を置き、滑らかになるまで火をかけた。プディング作りにはダッチオーブンを使用した。参加者は実施者に話を聞いたり、カメラで写真を撮ったりしながら、興味深く野外調理に取り組んでいた。特にダッチオーブンを使い方に関して、興味を持つ参加者が多かった。活動中はリンゴの皮を剥いたり、板チョコレートを袋の中に入れ砕いたり、それぞれ仕事をもって取り組んでいた。

4）試食

チョコレートフォンデュとプディングの他、コーヒーが参加者に振舞われた。参加者からサツマイモの提供があり、急遽焼き芋も作られた。先にチョコレートフォンデュができ、「リンゴの酸味とチョコレートの甘さが合う」や「パンにつけて食べてもおいしい」と和気藹々と人それぞれ好みのものを話しあっていた。プディングも見事に完成し、好評であった。

【まとめ】

今回のワークショップでは「森カフェ」の 5 つのキーワードがあった。参加者同士で私はこれが好き、あれがおいしかった、ととても和やかな雰囲気の空間が作り出されていた。グループを越えて協力し合う動きが自然と生まれ、「場所づくり」「関係づくり」を考えるヒントが得られたのではと思う。

【記録担当者】 坂田 拓史

WS28

マジックで環境教育に活用する

実施者： 浅見　哲（公益社団法人日本環境教育フォーラム元理事）

【概要】

人に驚きを与える人工物であるマジック（通称手品）と、自然体験の中にある驚きをコラボさせることを参加者とともに試行錯誤するワークショップ。マジックを使った環境教育の手法について 20 分ほど概要説明・披露をした後、マジックの練習をしながら、自然体験の中で活用する方法をグループに分かれて考えた。

【実施内容】

1）マジックの概要と自己紹介

参加者同士の自己紹介と、アイスブレイクを兼ねてマジックの披露が行われた。

手のひらサイズの小さな木の箱を参加者が触ってみる。箱についている小さな突起をスライドさせると、中からクモやヘビなどのおもちゃが飛び出してくるびっくり箱であった。これには参加者は驚いて思わず笑っていた。

2）生活・自然体験の中にマジックの応用を考える

①消えた水の行方

アイスブレイク後、おもむろに実施者が電子申告の話をしながらペットボトルの水を飲み始める。実はここからマジックは始まっており、飲んでいたペットボトルの水を用意された紙コップに右から左に順に移して行こうとするが、さっき移したはずの紙コップから水が落ちてこない。しかし 1 個飛ばした紙コップを見てみると、なぜかそちらに水が入っているというものだ。マジックは必ずタネがあるといい、タネ明かしに入った。

②落ち葉の裏から現れるカエル

実施者が作ったマジックである。普通の落ち葉を手に持ち、「裏も表も～」と言いながら、一回落ち葉をひっくり返すと両方表なのだが、2 回目回すとなぜか突然カエルが現れるというものである。これは手首の回転の仕方と、見る側の視点の位置を工夫したもので、参加者も練習したがなかなか難しいようで、一生懸命練習する姿が見られた。

③空き缶がよみがえる！

子どもたちと自然体験の最中に空き缶を見つけた、という設定。捨ててはいけませんねと言いながら空き缶を手にとり、おもむろにさすっていると、へこんでいた空き缶が元に戻り、プシュっという音を立ててあいた。紙コップにカンを傾けると中からはないはずのジュースがあふれてくるというマジックであった。

④空き瓶が消える！

一本のワインボトルを捨てずに消してしまう方法がないかと、新聞紙でくるみ始める。そしてワインボトルをくるんだ新聞紙を参加者の前へ持ってくる。次の瞬間、実施者が新聞紙を勢いよくぐしゃりと押しつぶしてしまう。実は参加者の前に空き瓶をくるんだ新聞紙を持ってきたときには、すでに空き瓶は手の中にはなく、長机の下にスライドして落とされていたのであった。新聞紙からのぞいていた空き瓶の口のフェイクがあったため、手の中にあるように見えていた。

⑤割りばしが消える！

次は割りばしと封筒を使ったマジックである。割りばしは環境においてあまりいい存在ではないと話しながら、封筒の中に入れる。そして次の瞬間、封筒とともに手に平の中に消えてしまう。

ここではマジックを子どもたちにいかに見せて興味を持たせるか、という実践。参加者が披露する時間を設けた。導入部分はとてもうまくいったが、肝心のマジックがうまくいかないなど、練習の大事さに参加者からも共感する様子が見られた。

【まとめ】

今回のワークショップのねらいは、マジックを使った環境教育への導入部分での活用を考えることと、マジックにおける練習の重要性に気づくことであった。参加者はマジックを見ることと、実際にやってみることの両方を体験することでさらにその難しさと魅力に気づいているようだった。

【記録担当者】鈴木　奈美

WS29

拡げよう！特定外来生物駆除活動の輪！

実施者： 米山 裕美子（認定特定非営利活動法人富士山クラブ）

【概要】

富士山クラブの活動を紹介すると共に、「特定外来生物」をキーワードに、各地で行われているさまざまな活動事例報告、ボランティア体験談、自分の生活する地域の特定外来生物の状況など、自由に意見交換を行い、特定外来生物について多くの人に知ってもらうワークショップ。また効果的な駆除、周知、防除対策について共有し、考える場となった。

【実施内容】

1）取り組みの紹介

はじめに実施者による富士山クラブの紹介を行った。年間、駆除活動および清掃活動では 5,000 人以上のボランティアが富士山の環境保全のために訪れている。また富士山クラブでは、森づくり活動や環境教育活動も展開している。今回は、数ある問題の中から、特定外来生物に焦点をおいた。

2）自己紹介

続いて、参加者の自己紹介を行った。A4 用紙に名前、所属団体、このワークショップに参加した理由について書き、参加者一人一人が書いた A4 用紙を提示しながら自己紹介を行った。自己紹介の中で、今回のワークショップに参加した理由を聞いたことについて、特定外来生物の駆除活動に参加したことがある、または活動を行っている人々は、なにかしらの悩みを持っており、その悩みを共有した。

3）富士山麓における特定外来生物の状況

富士山麓地域における特定外来生物に関する認識が非常に低く、外来生物の育成を禁止する法律があることを知らない人が多い。富士山麓では、動物における特定外来生物として、ブラックバスやガビチョウ、アライグマ等がいる、また植物における特定外来生物として、オオハンゴウソウやオオキンケイギク、アレチウリ等がいる。これらの特定外来生物の駆除や頒布についての解説を行った。特にアレチウリについて、写真や分布図等を用いて解説を行った。参加者は、真剣な面持ちで実施者の話を聞いていた。

4）参加者それぞれの悩み共有グループワーク

4～5 人のグループに分かれて、グループワークを行った。参加者が行っている活動での課題を発表し合い、その課題を解決するためにどのようなことが考えられるか等の意見を出し合った。参加者はそれぞれのグループでテーマを決め、熱く話し合っていた。グループワーク終了後、各グループから対象（特定外来生物）・課題・解決方法の 3 つを主軸として、発表を行った。

課題では、植物は見分けが難しいことや、綺麗に咲いている植物を採ることもあるため、通行人などになぜ採るのかと問われ、説明が難しい等があがった。また動物は、命をとることになるため、なぜ駆除しなければいけないか伝えることが難しいことがあがり、そのほかに駆除活動するに当たって、参加者をどう募るか等があがった。解決方法では、繁殖を防ぐために重機で地表ごと削りとるといった大規模な方法から、ほかの動植物に影響を与えないために除草剤を一本ずつ塗るといった地道な方法まで、幅広くあがった。グループ発表終了後も、参加者から積極的に意見が出されていた。

5）ふりかえり

活動を行っていて、情報交換ができる場が少ないため、参加者が所属する団体や個人で、情報交換を開く場を提供してほしい、また活動をどんどん拡げていってほしいとの想いが実施者から伝えられた。

【まとめ】

「特定外来生物」をキーワードに、実施者と参加者が駆除活動を行っている中での課題とその解決方法考えるワークショップとなった。自己紹介の場面から、参加者同士による特定外来生物についての議論が生まれ、グループワーク終了後でもまだまだ話し足りない様子だった。最後には、来年も「特定外来生物」をキーワードにワークショップをやろうと実施者、参加者ともに意気込んでいた。

【記録担当者】 高橋 直樹

WS30

持続可能な未来のための科学技術との付き合い方2

実施者： 小寺 昭彦（サイエンスカクテルプロジェクト）

【概要】

環境問題に取り組むためには、科学技術の役割も重要であり、実際に医療、IT、モビリティ、エネルギーなどの進化は、豊かさ、便利さ、効率などのプラスをもたらす一方で新たなリスクも生み出し、我々のライフスタイルや社会を大きく変容させている。そこで科学技術に興味がない人（ある人）や、科学技術に興味のある人を対象に、最新の科学技術のトピックスをテーマに、個人としてあるいは社会として「科学技術とどうつきあうか」を話し合い、さらに環境教育の中にどう活かしていけるかを考えるためのワークショップを行った。

【実施内容】

1）自己紹介

実施者が参加者全体に向けて自己紹介をした後に、4 人 1 グループに分かれ、自分の名前、所属、キーワードなどを簡単に紹介した。

2） ディスカッション

自己紹介終了後、さっそくディスカッションにとりかかった。ディスカッションの題材が書かれた A2 サイズの用紙が各テーブルに 5 枚配布された。その題材は『①食べ物を選ぶ基準って？』『②長生き、治療、より良い人生のために何が選択できる？』『③清潔ってどこまで必要？』『④最新技術を社会はどう受け入れるべき？』『⑤自然、災害にどのように対処していくべき？』の計 5 つである。話し合いの形式はすべて参加者に委ねられており、どの題材を選択するか、一つの題材にどのくらいの時間をかけるかなども自由で、グループの裁量で話し合いを進めていた。

題材の書かれた用紙の裏には、題材についての最新情報等さまざまな情報や問いかけが記載されており、さらに深い話し合いをするためのきっかけとなっていた。参加者はグループごとにひたすら話し合いを行い、各グループ 3～4 つの題材についてディスカッションがされた。参加者はどの題材についても「おもしろい」「難しい」「考えたことがなかった」と口にしていた。参加者は自身の熱い想いや考え、疑問等を積極的に交流しており、非常に生き生きとしていた。

【まとめ】

今回のワークショップのねらいは、環境問題の解決に取り組むためには、科学技術の役割も重要である中で「科学技術とどうつきうか」について参加者に考えてもらうことである。そしてこの話し合いを行っていく中で、実施者は参加者に「もやもやしてほしかった」ため、もやもやするほどたくさんの考えが浮かぶような題材がディスカッションのテーマとして選択された。

ディスカッション後は各グループがどの題材を選択し、話し合ったのかを集計し、1 グループにつき 1～2 人ずつ感想を発表したり、実施者に対して質問をしたりといった時間をとった。「理解しているつもりでも事実とイメージが混合していることに気づいた。」や「便利さは行き過ぎるとその便利さに溺れてしまうと感じた。」というような感想があった。科学技術を環境教育に活かしていくためにはどうしたらよいのか、科学技術と付き合っていくためにはどうしたらよいのかを熱く語り合い、ワークショップ終了後も話し合いを続ける参加者もいたほど、熱が冷めない様子だった。

【記録担当者】西尾 有香音、古曽尾 胡桃

早朝ワークショップ

◆ヨーガと瞑想

実施者：中野民夫（東京工業大学リベラルアーツ研究教育院）

朝の気持ちの良い時間に、身体を、呼吸を、心を整えるワークショップ。ハンターホールの高い窓から臨む清里の朝の風景を正面に、冷えてしまっている体を各々ストレッチでゆっくりほぐす。スタートは実施者から呼吸法の指導。実施者の声に合わせてポーズを変えながら、硬くなった体を伸ばす。届きたいところに届かない手や足を気にしていると「大事なことは人と自分を比べないこと。自分の身体に耳を傾けて」

ヨーガの後は、実施者自身が書いた歌を全員で歌う。今、生かされていることに感謝する歌。自分の内に”気”を向けることができ、とても充実した時間となった。

◆甲虫の玉虫でアクセサリーを製作しよう。

実施者：小林　伊久子（バジリコ（食の研究グループ）

甲虫の一種である玉虫（の亡骸）を内臓以外すべて使って、ペンダントを作るワークショップ。材料の玉虫は、実施者が 1 年かけて採集したもの。森の奥深くではなく、意外とその辺の林にいる。美しい翅に、参加者は驚いた様子だった。ピンセットとセメダインに翻弄されながら、無我夢中で作品作り。そのままの形で使ったり、ハサミで切って向きを変えて並べたり、それぞれ個性が出たが、どれもとても美しい仕上がりとなり、参加者はお互いに見せ合って自画自賛。希望者はペンダントだけでなく、髪留めも作ることができた。

最後は温かい手作りの竹の葉茶を淹れ、自然の恵みを体感する時間となった。

◆冬鳥と出会い、地球を感じよう

実施者：安西 英明（公益財団法人日本野鳥の会）

当日朝は気温 1 度、澄んだ空気だった。集合場所では、実施者によって野鳥に気づく手がかり、使用する双眼鏡などの説明が行われた。歩き出すと、時折野鳥の群れが飛び立ち、参加者から声があがった。ロシアから飛来したアトリなどの冬鳥、鳥たちを支える生物や自然環境の解説に耳を傾けていた参加者は、知識だけでなく、身振り手振りを交えた実施者の話し方、数々の教材（標本や小道具）にも興味を引かれていた。

◆清里朝散歩♪

実施者：志田　麻子（公益財団法人キープ協会　実習生）

朝日を浴び､澄んだ空気を吸い込みながら清里の森へと向かう。途中、モミの葉を手に取り、その匂いを楽しみながらリラックス。そして、森のなかに入ると、実施者のインタープリテーションのもと、参加者同士で落ち葉を拾い、グラデーションごとに並び替えてみたり、レジャーシートを敷いて、1人でのんびりしてみたりと清里の森を満喫。参加者からは、清里の森でゆっくりと過ごしたことで､頭の中がスッキリしたといった感想が寄せられた。

【ポスター展示団体一覧】

1. 北海道教育大学釧路校
2. 黒松内ぶなの森自然学校
3. 特定非営利活動法人つがる野自然学校(旧：岩木山自然学校)
4. 岩手県立大学
5. 特定非営利活動法人 ECOPLUS
6. 板橋区立エコポリスセンター
7. 株式会社生態計画研究所
8. 公益財団法人日本野鳥の会
9. 一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン
10. 特定非営利活動法人イクメンクラブ
11. 一般社団法人 ウィルダネス メディカル アソシエイツ ジャパン
12. NTT ジーピー・エコ株式会社
13. 東京都立　小峰公園ビジターセンター
14. 有限会社グレイスアカデミー
15. 一般社団法人　公園財団　【プロジェクト・ワイルド】
16. 特定非営利活動法人　純銀アート協会
17. 特定非営利活動法人日本エコツーリズムセンター
18. 一般社団法人環境パートナーシップ会議
19. サイエンスカクテルプロジェクト
20. 労働金庫連合会
21. 公益社団法人日本環境教育フォーラム
22. 横浜英和小学校
23. 帝京科学大学古瀬研究室
24. 山梨英和中学校･高等学校（山梨英和中学校･高等学校の環境教育）
25. 特定非営利活動法人 都留環境フォーラム
26. 公益財団法人キープ協会
27. 認定特定非営利活動法人富士山クラブ
28. 海藻おしば協会
29. 公益社団法人日本環境教育フォーラム（大阪マラソン枠）
30. 公益社団法人日本環境教育フォーラム（大阪マラソン枠）
31. 岡山理科大学　自然を学ぶ会 NSS
32. パタゴニア日本支社

ポスター展示は、幅 70cm×高さ 170cm×厚さ 5mm の板状のダンボール 1 枚と支えるための椅子 1 脚を 1 団体に割り当て、ポスターセッションの際は板状のダンボール 3 枚をつなぎ合わせて三角柱にする「さんかくん」を用意した。

発表者はポスターの掲示の他、パンフレットやチラシを椅子に置いて展示。ポスターセッションの時間は、活発な意見交換が会場中で行われた。

2日目　全体会2「日中韓スウェーデンの環境教育比較研究」

挨拶　：　韓国環境教育ネットワーク(KEEN)代表　　金澤千（キム テッチョン）　氏

全体会2「日中韓スウェーデンの環境教育比較研究」

ファシリテーター　：

公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）理事長　　川嶋　直

国際事業部　加藤超大

パネリスト　：

中国　　李（リ）　妍焱（ヤンヤン）　氏（駒澤大学　教授）

韓国　　元（ウォン）　鍾彬（ジョンビン）　氏（日中韓環境教育協力会コーディネーター）

スウェーデン　Lena Lindahl　氏（Link & Learn International 代表）

日本　　阿部　治　氏（立教大学教授／日本環境教育フォーラム専務理事）

挨拶　：　環境省 環境事務次官　　小林 正明　氏